



鈴森会 会報 発行所 千代田区神田岩本町 一番地 岩本町ビル内 鈴森内科事務局 電話 (3253) 7081 発行者 石川 喜一郎 編集発行人 齊藤、仲松

糖尿病治療の パラダイム・シフト

糖尿病患者は年々増加し、最近では患者数は900万人で、そのうち200万人が治療中であり、予備軍が約1500万人といわれている。これは欧米型生活習慣の結果であり、運動不足と肥満によるものと考えられる。結果的には肝筋肉への脂肪沈着によるインスリン抵抗性を惹起する。さらに合併症(透析等)を含めると、医療費も膨大な額となっている。同時に病因、検査や治療の進歩も著しく2型糖尿病遺伝子の発見(KCNQ1)もあり、24時間血糖測定装置も開発され、血管管理も容易になってきた。病態では、アディポネクチンの発見であり、それはインスリン感受性を亢進させるといわれ、小型脂肪細胞から分泌されるといわれ、治療においても新しい作用機序の薬剤(インクレチン関連薬)が開発された。二〇〇九年一月にイン

クレチン作用を高めるDPP-4阻害薬シタグリプチンが発売され、二〇一〇年一月に同じDPP-4阻害薬ビルダグリプチンも製造された。また、GLP-1受容体作働薬(リラグリチド)も製造承認された。最近、報告された特徴として低血糖がないこと、動脈硬化を予防する効果が確認されたこととあり、以下説明する。

新しいタイプの2型糖尿病治療薬

I、DPP-4阻害薬

1、シタグリプチン(商品名:ジャヌビア、グラクティブ)の臨床 当薬は食後の高血糖を適切なインスリン分泌でコントロールする新規のタイプの2型糖尿病薬である。日本では昨年十二月に発売されており、臨床成績についても報告されている。作用機序は従来薬と違って、インクレチンを増強することより、膵臓のβ細胞(インスリンを出す細胞)の機能低下を改善してインスリ

II、GLP-1受容体作働薬(リラグリチド)

分泌を促し、肝臓での糖産生異常も是正し、血糖を調整する。さらに、血糖上昇に応じてインスリンを出すため低血糖の危険性も少ないといわれている。本薬は1日1回投与で、ほぼ24時間血糖低下作用が発揮されるといわれ、血糖高値のみに作用するので、低血糖も少ないといわれている。有害事象としては腹痛(3・4%)、嘔吐(1%)と少なく、まれに白血球数、尿酸増加するといわれている。HbA1Cは0・6%〜0・8%の低下が期待されている。

2、ビルダグリプチン(エクア)の臨床

DPP-4阻害薬ではあるが、6カ月間の投与(100mg/日)でHbA1Cが1・1%低下ととくに中性脂肪、総コレステロール、LDL-Cの低下が著明で血糖低下作用とともに脂質低下改善作用も期待されている。欧米では2型糖尿病単体、メトホルミンとの併用療法として承認されている。

新しいタイプの治療薬と期待される。インクレチン関連薬の登場により、糖尿病治療の選択技が拡がり、糖尿病治療の考え方が大きく変わった。糖尿病は日常診療の中で大きな割合を占め、一生の管理が必要である。個々人にあつた治療が望まれるが、最終的には血糖コントロールの目標は合併症の予防であり、進展防止であり、動脈硬化による心筋梗塞や脳梗塞の予防でもある。従って、日常生活の指導とともに、血糖管理、血圧、脂質をできる限りコントロールし、健康維持できるような全人的、統合的治療が要求される。(重本 幸子)

おわりに インクレチン関連薬の登場により、糖尿病治療の選択技が拡がり、糖尿病治療の考え方が大きく変わった。糖尿病は日常診療の中で大きな割合を占め、一生の管理が必要である。個々人にあつた治療が望まれるが、最終的には血糖コントロールの目標は合併症の予防であり、進展防止であり、動脈硬化による心筋梗塞や脳梗塞の予防でもある。従って、日常生活の指導とともに、血糖管理、血圧、脂質をできる限りコントロールし、健康維持できるような全人的、統合的治療が要求される。(重本 幸子)



第42回 鈴森会研修旅行(鴨川館) 平成21年10月17~18日